

7月14日(土)

2012年(平成24年)

発行所：名古屋市中村区名駅4-7-1  
〒450-8651 電話(052)527-8000  
毎日新聞中部本社

名古屋市中区正木2-3-1 〒460-8351  
電話(052)324- 報道1101 事業1936  
販売1105 広告1931  
毎日新聞名古屋本部

# 薬物依存症者の社会復帰応援

薬物依存症者の更生支援施設「岐阜ダルク」(岐阜市)は、女性のための寮「女性ハウス」の設立を目指して寄付金を募っている。現在、女性寮があるのは、栃木・東京・大阪・高知・宮崎の5都府県のみ。再犯率が高く社会復帰が難しいとされる薬物依存症者を孤立させず、刑務所などを出た後の「受け皿」にしたい意向だ。

【加藤沙波、写真も】

「ここを出たら、すぐにうちにおいで」。岐阜ダルク代表の遠山香さん(47)は、この言葉を何度ものみ込んできた。

女性受刑者を収容する笠松刑務所(岐阜県笠松町)に05年から薬物離脱指導に向き、多くの受刑者と接してきた遠山さん。出所後の受刑者が受け入れられないもどかしさが募り、寮なら金銭管理や家事など日替の細かいケアをしながら、更生を図ることができると考えた。彼女たちは薬をやめられな



岐阜ダルクで通所者と談笑する遠山香さん(右)

## 岐阜ダルク 女性寮設立へ寄付募る

い怖さとともに、出所後どう生活していくのかという不安もある「犯罪白書によると、10年に算せい刑取締法違反の罪で服役した女性受刑者は861人。女性受刑者の39%を占め、最も多い。同罪による再入所者は48・8%。男性の28・5%を大きく上回っている。岐阜ダルクは現在3人が通っており、1日3回のミーティングと運動プログラムを実施している。

近年、「薬をやめたいが、行く場所がない」「通所は大変だから入所したい」といった声が女性から寄せられ、他県のダルクからも女性寮の開設に関する要望が増えてきたという。「更生して元気になった女性が増え、その存在が手本としてとらえられているのだから」。遠山さんは、寮への要望が高まっている背景をこうみる。

遠山さん自身、16歳のときに知人に誘われシンナーを使ったのをきっかけに長年薬物依存に苦しめられてきた。結婚し、子どもを産んだ後も覚醒剤を使った。「やめられなくなるとは思いもよらなかった。2人の息子を養育していた」。立ち直れたのは名古屋ダルクの支援を受けたことだった。

岐阜ダルクは、寮開設に先立ち、刑務所の仮出所者に一時的な居住場所を提供する「自立準備ホーム」の受託団体に登録した。目標は350万円。まだ数万円しか集まっていない。問い合わせは岐阜ダルク(0568-251-6966)へ。